

吹奏楽部における集団づくりに関する研究

教科・領域教育学専攻

芸術系（音楽）コース

M08202F

渡邊 祐子

1. 研究の動機と目的

社会の変化とともに人々の考えや行動が変化してきている。その中で学校教育は、最も重要な役割となり、これから先の生徒自身に大きな影響を与えることとなる。自分の感情や意見を表現すること、コミュニケーション力などが希薄化しているが、これらを身につけるには、集団活動で人にもまれること、何かに情熱を注ぐことこそ大切ではないかと考え、部活動に着目した。

我が国の部活動の歴史は古く、明治時代以来までさかのぼる。長い間、学習指導要領の位置づけなどいろいろと試行錯誤されてきた。その長い歴史の中で多くの方が、生涯の友人を得たり、社会経験を積んだり、人間形成にも多大な貢献をし人々に夢や希望を与えていると思われる。「クラブ活動」が「部活動」となり、子どもたちにとって今では欠かせない存在となってきている。

少人数バンドから大人数バンドまで様々だが、部活動で人にもまれることも大切だと思う。特に、その中で音楽の持つ可能性はとて大きく、吹奏楽部は音楽を通して人間として成長する場であると考え。学級以外の集団活動である部活動（吹奏楽）で、ルール、礼儀・マナー、日常生活から重視していくことが何より大切である。日頃の厳しさに培わ

れた力が、集団の力となり、より高い音楽と音楽の良さである感動を生み出すと思う。些細な事にうれしさを感じたり、大きな感動に涙を流したり、また、悔しい思いをしながら人間は成長していく。その背景となる学校や生徒の実態に応じた効果的な指導、学校と家庭（保護者）との協力の必要性など、具体的な部活動の内容が重要になってくる。指導に携わっているからこそ感じたものは、私に強い影響を与えた。実際に生徒と触れ合い指導する中で、指導・教育する教師の重要さ、影響力、生徒の人間形成力、音楽との結びつきがいかに大切かを実感したところである。

そこで生徒に左右するのは、教師・指導者の考え、指導法、環境ではないかと考えている。去年の6月から10月にかけて、3校の中学校にお邪魔させていただき、ビデオ録画と顧問の先生にアンケートをお願いし、実態を捉え研究にあたった。

2. 論文の構成と概要

はじめに

第1章 部活動における集団づくり

第1節 教育課程における部活動の位置づけ

第2節 集団づくりの意義と内容

第2章 部活動の実態調査

第1節 A中学校の実態調査
 第2節 B中学校の実態調査
 第3節 C中学校の実態調査
 第3章 実態調査の分析・考察
 第1節 3校の特徴
 第2節 3校の比較分析
 第3節 部活動顧問のアンケート
 おわりに

第1章では、部活動の位置づけから改訂後の部活動の変遷を述べてきた。そして集団づくりの成立から意義・内容を考察した。

ここでは、学習指導要領に「部活動」と位置づくまでの経緯、部活動の教育的意義はどのようなものか、部活動の課題、教師の指導性までを認識できた。集団づくりの根本から知ることができた。個あつての集団であり、個をどのように捉えるかが、集団と個への指導の原点であると考えに至った。

第2章では、3つの中学校の活動内容を具体的に提示し、それぞれのカラーから、教師・指導者の指導内容、それによる子どもの変容までを細かく表にした。そうすることにより、各学校の吹奏楽部の様子が明らかとなった。指導言で子どもが変わったのか、子どもの様子に対して指導をしたのかを捉えた。

第3章では、表による分析・考察を行い、各学校の比較・分析を行うことで特徴が見えてきた。また、顧問の先生へのアンケートにより、先生方の指導方針、考え方を知ることができ、共通する部分と独自の指導言、考えを捉え、2章の活動記録と結びつけ、考察できた。その中で、教師が子どもに育ててほしいこと、信念が見えてきたのである。筆者はやはり指導者の指導の在り方がその時の子どもに、

将来の子どもに大きく影響するのではと強く思ったのである。

3. 研究のまとめ

学習指導要領による「部活動」の位置づけから、子ども達にとって部活動は大きなものであることが分かった。また、音楽にも熱中していたことも目の当たりにした。

そのような子ども達にとって、部活動の顧問の先生が作り出す、指導法・環境・子どもの変容等に対しての指導など様々なことが明らかとなった。特に部活動顧問のアンケートからは、考え方、指導方針などを明確に捉えることができ、それが直接子ども達の活動に影響を与えていたのである。

筆者が研究として伺ったときには、どの学校もコンクール間近であった。そうすると子どもは、どうしても結果重視の考え方になってしまっていた。例えば「全国大会に行きたい」「金賞をとりたい」などの声も聞こえてきたのである。その時筆者は、顧問の先生が考えておられる部活動の意義や目標・目的を生徒の様子から捉えるのはとても難しく感じたのである。しかし、コンクールを終えたとき、涙する姿や、「楽しめた」「やって良かった」などの声を聞き、先生方の日頃の指導が行き届いているのが、生徒の発言から明確に捉え、確信を持てたのである。

主任指導教員 竹内俊一